

# システムとしての文化

— パーソンズにおける文化概念 —

平 田 毅

## 要 旨

文化という概念は、人間や社会を対象とした種々の学問領域で一般的に用いられてきた。しかし、その内容は多義的であり、使用法にも差異がみられる。本論においては、〈文化〉をその壮大な行為システム論の中に位置づけて、文化そのものをシステムとして捉えたタルコット・パーソンズの文化システム論についてその理論枠組みをみていく。その分析の準拠枠は、サイバネティックなコントロール・ハイアラキーと、AGIL図式である。前者は、システムにおける要素が低次から高次にわたって、制御と条件づけという位相のもとに配列されているというものであり、行為システムにおいては文化はその最上位に位置づけられている。また後者は、内的-外的および手段的-一成就的という二つの軸を交叉させることによって生み出された四つの次元での分析図式で、文化の各要素もこの枠組のなかで、適応、目的達成、統合、パターン維持といった機能をもつものとして、構造-機能的かつシステムティックに分析される。

キーワード：コントロール・ハイアラキー、AGIL図式

信念のシステム、表出的シンボリズム、価値のシステム

## はじめに

社会学的伝統および人類学的領域という人文・社会科学のなかでの〈文化〉の概念は、〈社会〉の概念との境界が曖昧なまましばしば混同されてきた。社会学においては、文化は社会システムから自然に派生してきたものとして捉えられ、一方人類学では、文化の一部としての社会構造や社会組織を扱ってきた。つまり、人類学者が文化として社会組織や社会構造を論ずる場合、それは社会学者のいう社会を問題としていたのであるし、また、社会学者が社会構造から

価値、イデオロギー、芸術、科学といったカテゴリーを区別するとき、それは人類学者にとっての文化を意味していた。

この境界の曖昧さを分析的に明確に区別したのは、他ならぬパーソンズであった。<sup>1)</sup> パーソンズは文化と社会という概念を次のように区別している。文化とは「人間の行動を形づくる要因としての、価値、観念、さらにその他のシンボリックに有意なシステム」であり、社会とは「個人や集合体間の相互行為の関係システム」である。パーソンズの行為理論においては、文化はシンボルのシステムとして、社会システムやパーソナリティ・システムと区別される。

パーソンズは、文化を行為システムの中に位置づけ、文化そのものをシステムとして捉えようとしたのである。

以下、このシステムとしての文化について、パーソンズの文化システム論に依拠しながら概観していく。

## 第1章 行為システムにおける文化とパーソンズの分析図式

パーソンズは、その行為理論において、すべての条件の中心点となるものとして、個人としての行為者、もしくは幾人かの行為者たちの集合体の行為を措定している。もちろん、個人としての行為者は、ある側面においては、生理的な有機体であり、集合体の場合もそれを構成しているものは同様に生理的な有機体である個人としての行為者である。しかし、行為理論で重要なのは、こうした有機体内の生理的過程ではなく、むしろ状況に対する行為者の志向の組織化にこそある。つまり、状況に対する単位行為者の行為の志向 (orientation of action) にこそ行為分析の中心があるといえる。<sup>2)</sup>

それぞれの行為の志向は、一組の行為の客体 (objects of orientation) を内包しており、それは、状況に関連した客体である。つまり、この行為の客体は、行為者の要求を満たし、目的を達成する様式に、いくつかの選択性を与えるとともに、限界をも設定するものである。ある状況は、行為者に(1)非社会的客体と(2)社会的客体という二つの種類の客体を提供する。(1)は自然的客体あるいは蓄積された文化的資源であり、(2)は個人としての行為者と集合体であり、ここには主体自身のパーソナリティも他者のパーソナリティも含まれる。

どの行為を為すかという選定の可能性を前提として、ある特定の状況で、行為者が客体との関連において選びとった特定の一組の選定が、個々の行為者にとっての行為の志向を構成する。つまり、「行為者の状況に対する志向」とは、行為者がかれの目標や利益との関連で自らの行為に付与する意味に導かれて行為が生起するときに存在するものとされる。そして、一つの行為のシステムとは、複数のこうした行為の志向、つまり〈意味〉が組織化されたものである。こうした〈意味〉は個々の行為者の発明品ではない。

パーソンズの行為理論においては、意味のシステムたる文化システムは、行為システムとしてのパーソナリティ・システムと社会システムとの関連から、二つの側面に分析される。それは、(1)行為システムの要素としての文化、(2)行為システムに外在する客体としての文化である。(1)の文化はパーソナリティに内面化されて欲求性向 (need-disposition) を構成し、社会システムに制度化されて役割期待 (role-expectation) を構成する。こうして、行為の志向たる〈意味〉は文化的要素としてある程度構造化されて実在しており、それが内面化と制度化を通して、それぞれパーソナリティ・システムと社会システムの中に、それぞれ異種同型的 (isomorphic) な構造を形成しているといえる。この欲求性向と役割期待は行為システムにとって不可分の要素であり、行為システムのさまざまな志向に一定の傾向を与える。また(2)の客体としての文化は、欲求性向や役割期待とは異なった外在的な記号の体系である。これは、行為システムの志向を統制するのであるが、行為システムの内面的要素ではなく、行為システムの外部の客体として作用する。<sup>3)</sup>

志向 (orientation) とは、行為者が行為の状況について抱いている概念で、行為の方向づけにかかわるものであるが、この志向は、分析上「動機志向」と「価値志向」とに区分される。動機志向は、行為者の欲求が充足されるか否かにかかわる側面で、認知、カセクシス、評価という三様式に分かたれる。<sup>4)</sup> 価値志向は、行為者が選択状況にあるとき、一定の規範や基準に方向づけを求める志向で、それは、動機志向と対応的に、認知、鑑賞、道徳の三様式の基準に区分される。したがって、行為の志向は、行為者の心理内的動機づけのパターンとしては、認知的 (cognitive)、カセクシス的 (cathectic)、評価的 (evaluative) の三つに区分され、それぞれに対応して文化的パターンとして結晶化

したとき、〈観念あるいは信念のシステム〉(systems of ideas or beliefs), 〈表出的シンボルのシステム〉(systems of expressive symbols), 〈価値志向のシステム〉(systems of value-orientation)となる。文化のシステムは数多くのこうした要素の高度に複雑な凝集である。つまり、文化の要素は、これらの志向がパターン化されたものとして設定されるのである。

行為者は認知的な識別によって、つまり客体の位置づけと特色づけによって、その行為の選定が可能となる。また客体は、行為者の動因(drive)を満たすか満たさないかによって、行為者にとって積極的もしくは消極的な価値をもつものとして、継続的に経験される。こうした客体に対する積極-消極的に反応する傾向はカセクシスの様式の志向とよばれる。カセクシス、つまり満足を与える客体への愛情と有害な客体への拒否は、行為の選定的性質の根底をなしている。このように客体に対する行為の志向は、必然的に選定あるいはより好みを伴うのであり、さらにこうした選定には、なにらかの評価の基準が必要である。評価(evaluation)は、真理という認知的標準、適正という鑑賞的標準、あるいは正しさという道徳的標準のいずれかに依存している。行為の志向とは、こうした数多くの選択肢からの選定の凝集である。

また、上述した三つの志向の型は、あるタイプの志向上の問題解決とみなすこともできる。すなわち、観念のシステムは認識上の諸問題の解決、表出的シンボルのシステムは感情をいかに「適切に」表現するかという問題解決、そして価値志向のシステムはとりわけ社会的な相互作用における評価上の問題解決である。<sup>5)</sup>

パーソンズは、この三つのうち価値志向の型は、行為システムにおいて特に重要な意味をもっているとする。というのは、価値志向のうちのある種類(道徳的標準)は、役割期待とサンクションを構成するようになる相互的な権利-義務のパターンを規定することになるからである。また、文化の型は、見かけの不整合を超えて存在する潜在的なシステムの型の一貫性(consistency of pattern)という統合性を保持する傾向があるので、信念システムの論理一貫性、芸術形式のスタイリスティックな調和、または道徳的なルールの合理的な同時存立性といった文化の型の内面的統合性は、文化の研究対象としては重要であるという。<sup>6)</sup>

ところで、パーソンズによると、文化システムは次のような特質をもっている。<sup>7)</sup>

- (1) このシステムを構成するものは、行為や相互作用ではなく、行為者が行なう選択を導き、複数の行為者間に起こる相互作用のタイプを制限する価値・規範・シンボルであり、したがって、
- (2) それは、パーソナリティや社会体系のような意味での経験的なシステムではなく、それらの体系から引き出された抽象的な要素の一種であり——もっともこのことは、この抽象的な要素が1つの経験的行為体系から別の経験的行為体系へと移行することを妨げない——、
- (3) その要素は相互にランダムでも無関係でもなく、ある程度の一貫性をもっていなければならない、
- (4) こうして一文化体系は、その相異なる諸要素が相互に関連して、価値体系、信念体系、それに表出的シンボル体系を形成するわけだが、ここにわれわれは〈1つの文化型〉みることになる。

パーソンズの行為理論においては、機能要件の分析に基づくAGIL図式と、文化の意味的コントロールを重視したサイバネティック・ハイアラキーの図式といった二つの分析枠組みを用いている。

元来「システム」という用語は、相互に関連しあう諸要素が、自己をとりまく環境の中で、一定の目的を目指して統合されている状態をさしているのであるが、このシステムを基礎として、二つの分析軸に基づくAGIL図式が導出される。すなわち、システムと外部の環境との関係から外的-内的という空間に関する軸が、システムのもつ目標性という特性から手段的-目的(成就)的という時間に関する軸が設定される。そして、この二つの軸の交差による四つの次元に、A(適応)、G(目標達成)、I(統合)、L(パターン維持あるいは潜在性)がそれぞれ適合的に重ねられる。<sup>8)</sup>

サイバネティックなコントロール・ハイアラキーとは、高次の意味が、エネルギーはあるが意味的には低次なものを制御することである。例えば、行為システムのサブ・システム間について見てみると、高次の意味の供給源は文化システムであり、その文化システムが社会システムとパーソナリティシステムを「上方から」コントロールしていることになる。一方、文化システムは

より低次システムにから条件づけをされることとなる。こうして各システムは、コントロールと条件づけによってハイアラキー状に配列されることとなる。

次章においてみるように、パーソンズ理論の根底には、このAGIL図式とサイバネティック・ハイアラキーという分析図式が一貫して横たわっている。<sup>9)</sup>

## 第2章 文化システムの諸次元とその組織化

〈文化〉は、本来的に伝達可能で、志向と行為の仕方 (ways of orientation and action) であり、有意味的なシンボルによって具現化されている。前述したように、行為理論の文脈での文化システムの要素、すなわち文化の下位システムは、行為志向の分析結果から導き出され、認知-カセクシス-評価の三つの次元に分析的に区分された。本章では、この文化システムの三つの下位システムについて詳しく見てみよう。

パーソンズは、ここにおいても、行為システムおよびその下位の他のシステムの分析と同様に、文化システムの分析にあたって、①コントロール・ハイアラキーによるもの、②外的-内的軸によるもの、③手段の-成就的軸によるものという三種類の方法を用いてその構成要素の分析を試みる。

これまで、文化の構成要素つまり文化の下位システムを、観念または信念のシステム、表出的シンボルシステム、価値志向の基準 (評価システム) の三つ分類して述べてきた。しかし、後期パーソンズの文化システム論においては、四つ分類様式に再編成される。それは、一番目の観念または信念のシステムのうち、非経験的および評価的な意味を含んだ要素が除かれ、その一部が新しく四番目の実存的システムおよび「究極的実在」というカテゴリーに吸収されたためである。

この新しく再編成された文化の四種類の構成要素である下位システムは、AGIL図式との関連のもと、A認知的システム・G表出的システム・I評価的システム・L実存的システムとして配列される。これらの下位システム自体の構成要素もまた、後述するように、AGILとサイバネティックなコントロール・ハイアラキーの分析図式によって組織化されるのである。

ところで、文化システムの要素分析は、シンボル内容の分析に他ならない。こうしたシンボルが創出される源泉、つまりシンボル・システム総体は、人間主体の志向の内容、つまり客体への志向の型（文化システムの内的側面）と、その志向が向けられる客体の意味、（文化システムの外的側面）とに大きく分類される。ここでいう客体の意味とは、客体固有の属性ではなく、主体の志向内容の関数であり、関係的なものである。<sup>10)</sup>したがって、事実とは、認知的志向によって意味づけられた現実なのである。

こうして文化システムは、志向の様式によって、前述した四つの構成要素である下位システムに分析上区分され、L（実存的）→I（評価的）→G（表出的）→A（認知的）とサイバネティックなコントロール・ハイアラキーによって配列されることになる。

このように、パーソンズの文化システム論の骨格は、文化システムと他の行為システムとを分析上区別したこと、文化要素の分類、すなわち文化のサブシステムの分析を行なったことのあるといえる。以下、四つの文化のサブシステムそれぞれについて詳しくみていくことにする。

### 1. 信念のシステム

認知的意味を第一義的とする信念システムは、文化システムの四つのサブシステムのうち外部へ志向する次元の経験的な意味での認識対象としての客体への志向にかかわるものである。

認知的シンボルによって表現される文化要素は実在的（existential）観念ともいえるもので、行為状況の認識にかかわる。しかしパーソンズによると、それは状況の真実（reality）を反映するものではなく、真実に対する認知的志向の選択的なシステムであるという点で、特に事実（facts）と呼ばれている。<sup>11)</sup>その領域は、現代科学が証明したりすることのできる経験的なものに限らず、非経験的なものにも及ぶという意味で〈科学的知識〉をも含めて〈信念のシステム〉と呼ばれる。特に、経験的な認知的志向がはたらかない領域<sup>12)</sup>に関する知識は人間にとって決定的に重要でありながら科学が権威をもって答えることができないものであるから、この点で共通の志向の生成は社会システムにとって極めて重要な意味をもっている。<sup>13)</sup>

人間行為にとってその状況に関する実在的な認知をもつことは、行為の必須条件である。とりわけ、人間の相互作用を問題にする場合、共通の状況認知はその可能性を支える基礎的な要件であり、同時に、この共通の状況認知それ自体はコミュニケーションを媒介として成り立つ〈意味〉の安定的な分有を示すものである。

ところで、この認知的志向である信念システムは、経験的—非経験的 (empirical—non-empirical) という二つのサブカテゴリーに区分される。<sup>14)</sup> 同時に、このシステムは行為システムにもつ意味や関連の視点から、実在的—評価的 (existential—evaluative) の二つにも区分できる。<sup>15)</sup> こうした二方向へのサブカテゴリー化によって、信念システムは四つのサブカテゴリーに区分されることになる。

経験的な信念システムのカテゴリーには、実在的な範疇にはいる科学や評価的な範疇にはいるイデオロギーといったものが含まれるが、ここで強調されるべき点は〈制度化〉(institutionalization)の問題である。<sup>16)</sup> 制度化とは、ある規範的志向をもった行為の方が社会体系のなかで構造化することを意味する。科学的研究にしる応用科学にしる、その営みが社会の中で制度化されてはじめてその完全な展開をみせるものであって、科学者の役割が特定の職業的役割として制度化されたり、科学的な営為が大学などを中心として構造化することなどが、科学が近代において隆盛を見せる上で決定的プロセスであることになる。

科学の場合その主要な関心が実在的なものに対して、評価的な性格を持つイデオロギーの場合も、formal—informalの度合いによって制度化されている。イデオロギーとは、集合体の成員によって共有されている信念システムであり、それはその集合体の評価的な統合へ志向している諸観念のシステムである。イデオロギーは、その集合体の性質と状況に対する経験的解釈を焦点とするが、問題の性格上、非経験的解釈(たとえば、宗教的観念)によってフィールドバックを受ける可能性が強い。イデオロギーは、その認知的確信ゆえに〈道徳的〉確信に対する基礎であるという意味で価値志向の方向を正当化する役割を果たすので、社会システムの統合にとっては非常に重要な意味を持つことになる。

集合体の成員が共通のイデオロギーをもつことは、相互行為における〈共通の認知〉の一般的重要性からみて、社会体系の統合にとって望ましいことであ



るが、逸脱下位文化や対抗イデオロギー、制度化された既存の価値体系の再解釈を目指すラジカルな運動などによって、イデオロギー的葛藤は避けられない。そこにはイデオロギーがもつ認知的なゆがみの問題<sup>17)</sup>がよこたわっているのであるが、そのためイデオロギーは社会システム内に存在する主要な緊張・矛盾のシンボリックな意味での戦場となる。またパーソンズは、経験的認知二形態である科学とイデオロギーは、とりわけ緊張関係をもつことも指摘している。

ところで、信念システムにおける非経験的認知の分野は、単に残余範疇(residual category)ではない。なぜなら、この領域は基本的には、経験的認知の可能性そのものを問う認識論(epistemology)と経験的認知がどうしても解答を出すことのできないような問い、すなわち存在論(ontology)にかかわっているからである。

宗教的観念は、行為主体とのかかわりが強いため、純粋に認知的カテゴリーに収まりがたい。宗教は、認知的関心というよりは評価的な関心に第一義的な比重があり、それが行為に対するコミットメントの基礎となっているといえる。それは、カセクシスのおよび評価的関心のもとに、行為の認知的な状況規定をなすもので、その観念構成過程に目的論的発想が侵入している。つまり、行為者にとっての「意味の問題」がかかわってくるのである。この点では宗教的観念はイデオロギーと似ているといえるが、それはさらに経験的認知の対象(自然、人間性、社会、人生など)の意味の問題を、より広い哲学的な関心によって追求する。<sup>18)</sup>しかし、イデオロギーとともに宗教的観念が、純粋の評価的要素(価値志向の基準)と区別されるのは、これらがあくまで客観的世界を叙述する形での、事実命題の立論形式をとるためである。他方、文化の下位システムである評価的要素に関わる言明は、何が望ましいかについての規範的命題として表現される。すなわち、信念システムにおける評価的カテゴリーと文化の下位システムたる純粋の評価的要素とは、その立論の形式を異にしているのである。<sup>19)</sup>

文化システムの評価的要素(価値)は、イデオロギーや宗教的観念よりも直接的に、行為主体にとっての統合的機能を果たすものである。イデオロギーは行為主体の統合という問題とかわりながらも、現実への独立の志向を含んでおり、完全には人間の意志や願望に支配されるものではない。パーソンズがイ

デオロギーを「価値—科学統合体」と称したのはこのためである。<sup>20)</sup> 一方で、価値自体は、科学者の認知的要素の論理的帰結と無関係ではないが、認知的要素は、価値の内部で行為主体の統合という問題に関連して再編成されている。また、価値が認知的要素の論理的要素に投射されてその内容に影響を与えることもあるが、科学は価値の単純な投射ではない。<sup>21)</sup>

実在的—非経験的な信念システムのサブ・カテゴリーには、哲学・前哲学が含まれる。このカテゴリーは、現代科学の方法論の及ぶ範囲を超えているような認識対象に関わっている。この領域の観念は、科学的な方法では証明されえないが、あくまで客観世界の法則に即した論理—貫性を供えていることが要求される。

この領域の観念（哲学）と科学を含めた実在的な観念は、イデオロギーや宗教的観念といった評価的観念のように、行為主体の評価的関心とかかわるものであってはならない。ただ、実在的観念は、現実についての「観念」（ないしは知識）であって、現実そのものではない。しかし、その観念構成過程においては、現実に即すべきであるというエートスが支配しているのである。そのため、実在的観念は、当該社会の伝統主義や非合理的権威から相対的な独立性を保持している。これに対して、評価的観念は、客観世界についての認識が行為主体の統合への関心と結合して構成されたものである。それは文化の認知的部分をなすものとされるが、一方では行為主体の関心とかかわり、カセクシ的な意味の査定（欲求充足と阻害の問題）と評価的異議の査定（価値実現の問題）と結び付いている。<sup>22)</sup>

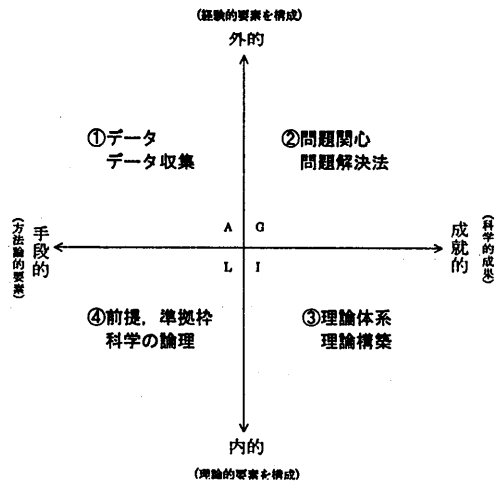
最後に、パーソンズが分析を試みている、信念システムのうち実在的—経験的カテゴリーである科学的な知識体系の、三種類の方法<sup>23)</sup>に基づく分析を概観しておこう。

まずコントロール・ハイアラーキーに重ねて、科学的方法論をその水準の高次から低次へと配列すると、次のようになる。

- ④ 前提、準拠枠
- ③ 理論体系
- ② 問題関心・問題解決法
- ① データ

最も低い水準にあるデータは、秩序だった、ある意味では整理・分類された事実<sup>24)</sup>に対する知識である。二番目の水準は、経験的問題に関する問題解決である。データは事実そのものの妥当性に関連して組織化される。利用可能なデータは、問題解決法を導き出すための原材料を提供する。データは、組織され、加工され、理論と関連づけられなければならないのである。第三の水準は、理論自体の構造であるが、それは経験的知識に対して統合の機能を果たしている。理論構造は、さまざまな客体のかかわる種々の事実を、秩序づけられたシステムのもとに相互に関連づけるための主要な基盤となり、知識の体系 (corpus) を形成する。最後の高次の水準である前提は、経験的には検証され得ないが、研究の対象となる問題の意味にとっての基盤をなしていると思われる「本源的な」概念のことである。この水準は、理論図式が「意味をなす」ような準拠枠を構成しており、科学が哲学と全面的・直接的なつながりをもつ論理的・認識論的な領域へと結び付いている。<sup>25)</sup>

そして、問題の意味は、事実の意味についての関心を制御し、理論における位置づけによって、特定の問題の意味や意義が制御されるのであり、準拠枠は、その理論体系の意義をコントロールしているのである。一方、問題は科学的な意義を有するかぎり、実証的なデータに基づいて解かれなければ、その問題は科学的に解決されたとは言いがたく、理論はまた、その経験的問題を通して検証されたものでないならば、科学的地位をもつ理論とはいえない。さらに、より高秩序に位置づく準拠枠は、それより低次の経験的な科学理論やその関連する諸問題の枠組として役立つならば、科学の中で占めるべき位置はないこととなる。こうして、この四つの構成要素は、④→③→②→①と制御に関するハイアラーキー



【図1】科学的知識体系の組織化の構造

とその逆方向の条件づけに基づく関係 (conditional relation) というハイアラキー状の秩序を形成している。

さて、このコントロール・ハイアラキーの構造と関わって、科学的知識体系の二つの分析軸 (内的-目的軸と手段的-成就的軸) による組織化の構造について簡単に図示すると【図1】のようになる。

パーソンズは上に示したような文化要素の組織化の方法を、文化の他の三つの下位システムにおいても適用している。次節以下、可能な限りみていく。

## 2. 表出的シンボリズム

文化システムの外部へ志向する二つの次元のうち、前節で述べた信念システムにつづく第2番目の下位システムは、表出的シンボルのシステムである。この表出的シンボリズム (expressive symbolism) の領域は、パーソンズによっても、行為理論そして文化理論の中で、最も遅れた部分とされている。

表出的行為とは、基本的に認知的および道徳的関心からは自由に、要求性向 (need-dispositions) を行動化することであるが、そこには他の行為の場合と同様に文化的な型あるいは形式が存在する。<sup>26)</sup> つまり、表出的行為では、その行為志向において即時的な欲求充足への関心が優位を占め、道具的および評価的な考慮が背後にしりぞくのである。そして、それは無軌道な仕方で実現されるのではなく、通常、文化の表出的シンボルを通して行われるために、一定の方向づけが与えられるのである。こうした活動は〈芸術的創造〉 (artistic creation) と呼ばれる。<sup>27)</sup>

表出的シンボルシステムは、行為システムの目標志向の客体としての意味とかわわっている。つまり、状況や環境内における行為システムにとっての不安定条件や緊張条件を直接にどれだけ安定させ得るかという観点から客体が眺められるということであり、表出的なこの文化の構成要素は、カセクシ的な関心 (cathectic interests)<sup>28)</sup> と最も直接的に結び付いている。そして、具体的な表出的シンボルは、相互行為過程のなかで次のような三つの機能を果たしているといえる。すなわち、①相互行為の当事者間の (カセクティックな意味の) コミュニケーションを促進し、②鑑賞的基準 (appreciative standard) による規範的規制を通して相互行為過程を編成し、③欲求性向の直接の対象となる

（表出的意義を本具的に備えた客体に対してではなく、表出的意義を示す記号自体がカセクトされること）のである。<sup>30)</sup>

特定自我 (ego) の具体的行為は、行為が向けられる他我 (alter) にとって、本来の意義以外の情緒的意味が加わっていることが多く、このような象徴的行為は表出的シンボリズムの発起源をなすものとされる。<sup>30)</sup> こうした行為は、自我の欲求性向の充足の様式であり。同時に他我に対する自我の態度がどうであるかに関する他我へのサインなのである。<sup>31)</sup>

パーソンズによれば、相互行為過程のうちで行われるこの象徴的行為を、表出的シンボリズムの発生する焦点とみなすならば、それと関連する態度のこうしたシンボル化を状況のなかの諸客体について一般化して分類することができるとして、次のように対象別に整理している。<sup>32)</sup>

- ① 行為者としての自我・他我：それぞれの行為はシンボルであり、それぞれの行為は、行為と関連した性質の表現として「解釈」される。（「正直な人」「親切な人」）
- ② 物理的対象の特殊なケースとしての自我・他我：身体の特徴は、不可避免地にシンボルの意義を獲得し、カセクトされる。（身体的特徴、ペニス＝「男らしさ」）
- ③ 自我と他我を除いた物理的対象全体：たとえば衣服は、それが肉体との直接的関係、視覚的印象、操作可能性をもっているゆえに、表出的目的のために大いに適切な媒体を提供している。
- ④ 文化的対象：芸術作品。その物的客体が表出的シンボリズムの文脈で意義をもたなければカセクトされない。

他我が志向の直接の対象である場合、表出的シンボリズムは、感情性－感情中立性 (Affectivity－Neutrality) および限定性－無限定性 (Specificity－Diffuseness) という二つの軸 (パターン変数) の交叉によって、四つの愛着 (attachment) の態度類型に分類される。すなわち、Ⅰ受容－反応 (receptiveness-response), Ⅱ是認 (approval), Ⅲ愛 (love), Ⅳ尊重 (esteem) である。<sup>33)</sup> パーソンズは、これら四つの基本的な態度類型のうちいずれか一つを象徴するものとして、前述したすべての客体について述べるができるとしている。

個々の相互行為レベルから分析された表出的シンボルは、具体的な集合体のなかで独自の構造と分化を示す、例えば、無限定であり感情的であるⅢ愛の態度類型に基づく相互行為関係からは、性的欲求の充足をめぐる、まず身体的特徴の周辺に特別のシンボル化がなされると考えられる。ここにおける第一の側面は「生殖的」水準であるが、当事者はそれを中心としてそれぞれの身体の性的に有意義な特徴を編成する。このことは、性交の相互的な性的欲求充足のそれ以外の可能性に対して一定のシンボルが優先していることを意味する。また、愛情関係という側面からは、相互の行為者の特定の行為（たとえば、話し方や贈り物の交換など、その時期や場所、仕方など）がシンボル性をもつようになる。さらに、愛の態度類型に基づくシンボル化は、一方では性別役割や親族体系といったより大きなシンボル化の一部をも形成しているのである。<sup>34</sup>

パーソンズは、こうした類型に基づくシンボル化の例証、および、表出的シンボリズムにおける役割分化の問題や芸術家の役割についても展開しているが、ここでは割愛し、別の機会に論ずることにする。

しかし、次のことにはふれておこう。それは、表出的シンボリズムと集合体との関係である。パーソンズは、集合体の感情を表出したシンボリズムを、単なる共通のスタイルとしてのシンボルと区別して、そこから表出的シンボルが有するカセクシス的で情動的な緊張の調整機能を分析している。集合体の感情を表出したシンボリズムは、純粹に表出的なものと評価的要素を有するものとに分けられ、評価的要素を有する表出的シンボリズムは、集合体成員の道德感情や欲求性向を表現しこれを規制しているのであるが、それはさらに第一次的に宗教的なものとそうでないものとに分けられる。このうち、第一次的に宗教的な表出的シンボリズムは、情動面を調整して、超自然的な観念システムと表出的シンボルとが結合したものである。宗教における媒介的シンボリズム (intermediate symbolism) は、認知的な面よりも表出的なシンボルとしての意義のほうが強いといえる。たとえば、神話に登場する人物は、集合体成員の欲求性向が投射された表出的シンボルとしての意味をもっており、それは、ある命題の厳密に認知的な妥当性よりも、その文脈での適切性にたいしてその意義を有しているのである。<sup>35</sup>

表出的シンボリズムは文化の評価的要素と結び付きやすい。宗教的芸術は、

元来は宗教儀式に付随する表出的シンボルとして創出されたもので、第一次的には評価的文脈での産物である。また、特定の集合体のもとでは、たとえば社会主義国におけるプロレタリア芸術にみられるように、その中心的価値を支えるような意図で表出的シンボルが生み出されることもある。表出的シンボルがこのように意図的に操作されると、本来社会システムの機能的必要に基づいて分化してきた役割に、特別の表出的なシンボル化がなされるようになる。表出的シンボル創造の専門家としての芸術家が、しばしば政治的に利用されるのはそのためである。<sup>36)</sup> このように分化における表出的シンボリズムシステムは、さまざまな形で認知的および評価的要素と融合している。文化の型が具体的行為状況から導出されたものであるとするならば、その性質上、それは必ず認知的側面と表出的側面とをそなえているといえる。<sup>37)</sup>

さて、前節の経験的認知システムでみたように、ここでも表出的シンボルを文化システム分析の方法を適用してみよう、カセクシスの客体の〈意味〉(meanings)はそれ自体で、でたらめには分類されえず、システムを構成している。よってここでも、二つの軸による組み合わせによる四つのサブシステムに分類して当てはめてみる。客体のもつカセクシス的な意味カテゴリーを最も低い水準①から順に配列すると次のようになる。

- ④ 一般化された尊敬 (generalized respect)
- ③ 包摂 (inclusion) または帰属 (adherence)
- ② 目標客体 (goal-object)
- ① 手段客体 (means-object)

まず、最も低い水準は「手段客体」であり、それは、経済学の用語では効用性の客体として扱われるものである。<sup>38)</sup> ある意味で「土台 foundation」であるこの最も低い次元は、パーソナルシステムにおいては、身体シンボルによって占められている。それは、力 (power) のような特質や実行能力 (performance skill)、身体の美的資質などや、フロイトのいうところの性的シンボルなどである。身体シンボルは、社会的に重要な意味を持つ愛着 (attachment) の一定の型を、一般化された意味を付与された客体カテゴリーとして形成する上で、最も重要な身体的特徴を利用するからである。<sup>39)</sup>

次の水準は、パーソナリティにとっての「目標客体」として扱われるもので

ある。すなわちパーソナリティとして行為するシステムが、この客体に対する特定の関係を獲得し、これを維持していくことが、そのパーソナリティ・システムにとって「自足的 (consummatory)」意義をもつ場合であり、行為者はそうした客体に対して「愛着をいだく (attached)」場合が多い。<sup>40)</sup> パーソナルシステムに即しているという、この水準は、分析的に有機体から独立したパーソナリティの特質——たとえば、「あたたかさ」とか愛情、攻撃性、独立-依存性など——に関するものである。客体としての人間に対するカセクシスにおいて、これらは典型的な特質で、好まないしは反感の対象として考慮される人間の「種類 (kind)」をカテゴリー化するという意味において顕著にあらわれる特徴である。<sup>41)</sup>

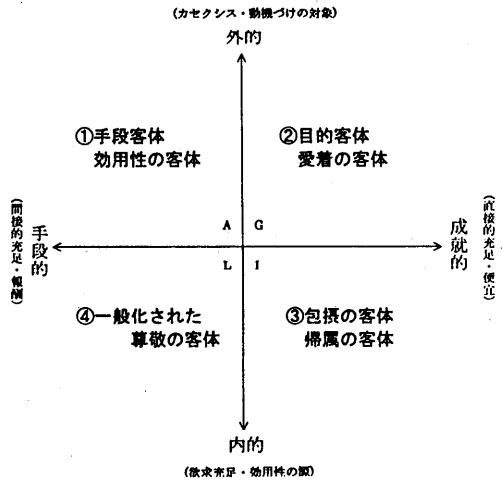
これら二つの水準は、相互行為のもっとも基本的な段階で重要である。とりわけ、目標達成の水準は特別の意義をもつ。つまり愛着の原型的な客体は他の人間だということである。それゆえ、愛着の水準にあるカセクシスは、この客体としてのパーソナリティに特にかかわっている。一方、効用性の客体は、生物学のおよび物的な客体である。パーソナリティの目標を達成するために、一連の道具とみなされた場合の個々の人間そのものの肉体が、その原型的なケースである。人を他の目的のための手段として扱うことに対する一般的な反発感、こうした区別がその根底にあると考えられよう。他方、物的客体を手段として扱うことは、通常妥当なこととして考えられている。<sup>42)</sup>

第三の水準に位置するのは、「包摂」あるいは「帰属」の水準である。これは、社会的意味において、その人は「誰か」ということがシンボル化されたものとその人に与えられた地位や集合体における成員性 (membership) の諸カテゴリーから構成されている。<sup>43)</sup> 包摂の対象となる客体は、基本的には、集合体のような社会的客体である。<sup>44)</sup>

あらゆる相互作用過程は、たとえそれが有機体 (第一の水準) のものであれ、人間 (第二の水準)、集合体 (第三の水準) のものであれ、そこに含まれる秩序は、より大きなシステムの部分となるものであり、それぞれの水準の相互行為過程はこのより大きなシステムの下位システムとしての意義をもっているといえる。したがって、カセクシスは、さらにより高次の水準をもっている。これは、相互行為過程によって形成される客体の水準であり、それらの「上部」



に位置し、規範的な意味で、相互作用を制御していると考えられるような客体（群）についての概念の水準である。この最高次の水準は、「一般化された尊敬」の客体に対するカセクシスといえる。それは場合によっては崇拜の対象ともいいうる。システムとしての社会にとって、それは、個々の規範とは分析上区別されるような一般化された側面を備えた、その社会の価値と規範の正当化の源泉に関わる



【図2】表出的シンボルの組織化の構造

ものである。<sup>45)</sup> 一般的な尊敬の対象となる客体は、文化的客体であって、それらはしばしば、認識様式のなかで、非経験的な位置におかれている。<sup>46)</sup>

また、客体のカセクシス的な意味カテゴリーの二つの分析軸（内的-目的軸と手段的-成就的軸）によって分類することができる【図2】。

ところで、客体のこのようなカテゴリーの位置づけに関する問題は、シンボリズムの問題と密接にかかわってくる。上述のカテゴリーは、行為の一般的な構造の水準で定式化されたものであり、文化的水準自体が関係するときに生ずる特別な様相を考慮に入れていない。文化の場合それは、具体的な客体関係の経験的な諸特性に対してでなく、意味そのものに焦点があてられていく。すなわち、カセクシスや効用性の対象としての実際の客体ではなく、シンボルが問題とされるのである。シンボルは、その「現実の」指示物と有意味な関係を持っていなければならない。ここでいう文化カテゴリーとは、表出的シンボリズムのカテゴリーであって、それは、「現実の」客体に対する本来のカセクシス的な関心とは区別される。<sup>47)</sup>

表出的シンボリズムの対象の重要な類型をカテゴリー化することに加えて、シンボリズムのシステムの第二の欠くことの出来ない面は、これらの意味の文化的一般性である。言い換えれば、それらは、十分に一般化された一組のパター

ンづけにおいて、「コード化され」(be coded),そして、このコード化の「理解」は一つの社会的共同体の中の構成員たちによって共有されているということである。表出的シンボリズムはコミュニケーションを通じての共有がなければ——つまり、表現のためにそれ(表出的シンボリズム)を使う人々にもまた、実際に、もしくは、潜在的に意図された意味に対してすぐ気がつく他の人たちという受け手がいなければ——、表出的シンボリズムは文化の一部となりえず、また、シンボリズムを全く組成することも出来ないのである。表出的シンボリズムは、感情的な経験について、文化的にコード化し、一般化することで構成されている。そこでは、取り入れられたシンボリズムは、ある特定の対象を伴うある特定の個人の経験を超えた、一般性、もしくは、普遍性の一つの秩序を持っている。特定の文脈でそのような意味をもつ客体は、まさにそのような一般化の過程によって、シンボルへと昇華されるのである。<sup>48)</sup> このシンボル化作用と、シンボルの意味を解釈するのに不可欠なコードとの区別は、外的-内的分析軸とも一致するものであり、このことは、文化の基盤としての言語の問題との関連で重要性をもってくる区分でもある。

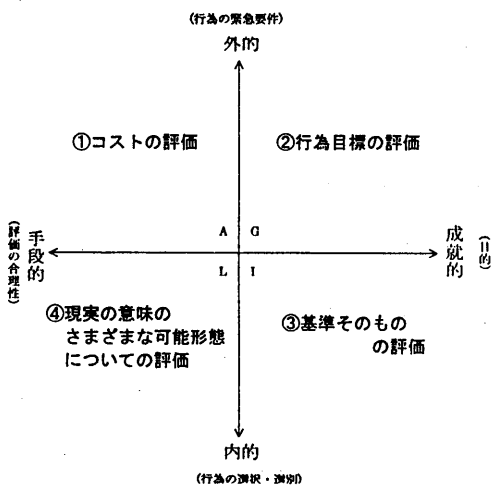
### 3. 価値志向のシステム：評価システムと実存システム

前節までに述べてきた認知的システムと表出的シンボルシステムという文化の下位システムは、文化システム全体のなかでは外部へ志向する次元のものであった。これに対して、ここでは、客体への志向の型という内的なものにかかわる二つの次元(評価的システムと実存的システム)をみていく。

文化的な場面で、この志向様式における内的側面を考えていく場合、それは統合とパターン維持というより一般的な概念を文化の領域に適用することになる。すなわち、統合(I)は評価的システムであり、パターン維持(L)が実存的システムにあたる。この二つの下位システムについても、パーソンズは、例の三つの方法を用いて分析を試みている。

評価的システムにおける一般的な水準でのサブカテゴリーは、①コストの評価、②行為目標の評価。③基準そのものの評価(道徳原理)、④現実の意味のさまざまな可能形態についての評価、である。これらの評価の型は、評価的優先順位の水準のハイアラーキーを構成している。つまり、客体のもつ経験的屬性

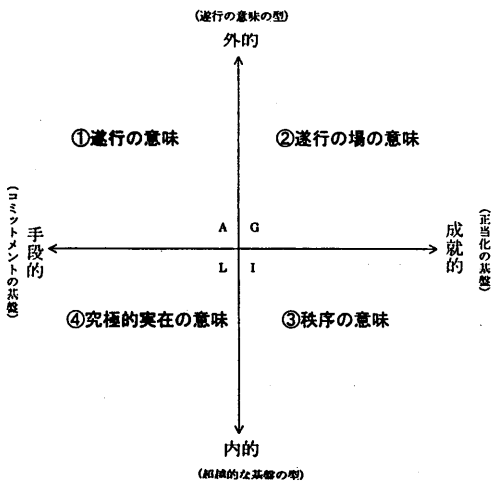
である生産および利用の諸条件に照らして手段客体がもっている効用性の評価であるコストの評価が一番低次に位置づけられ、その次に、種々の目標客体が本来望ましものであるか否かについての相対的な重要性の評価である、そのシステム内での目標の評価がくる。その上にあるのは、相対的優位性という観点から、これらの目標の追求を統制している基準そのものの評価である。そして最高次には、「世俗内的」業績達成の機会を与える場としての現実や人間行為が適合すべき秩序のシステムとしての現実などの、現実がもつ意味のさまざまな可能形態についての評価が存在する。<sup>49)</sup>【図3】



【図3】評価システムの組織化の構造

評価的システムにおける外的-内的という区別は、行為の緊急要件 (imperatives) と選択または選択のパターンの区別である。また、手段的-成就的という区別は、評価的合理性のパターンと目的のパターンとの区別である。<sup>50)</sup>

文化の四番目の次元である実存システムは、意味そのものの根拠に本質的にかかわっているものである。それは、個々の具体的な問題への志向の根底にあるような、人間的状況 (human condition) に関する最も一般的な世界観や定義と関連してい



【図4】実存システムの組織化の構造

る。これらの志向もまた、意味の基盤に即して、ハイアラーキー状に配列することができる。すなわち、①遂行 (performance) あるいは業績達成 (achievement) の意味、②その遂行の場としての領域の意味、③宇宙の秩序の本質についての概念、④究極的実存の概念、の四つの水準が順に低水準から高水準へとハイアラーキーを構成していると考えられる。ここでの外的・内的の区別は、遂行がもつ意味を規定している型とそうした遂行の意味の超越的な基盤を規定している型との間の区別であり、一方、手段的・一成就的の区別はコミットメントの基盤と正当化の基盤ということになる。<sup>51)</sup>【図4】

このように、文化システムの下位システムそれぞれについても、パーソンズは、サバネティックなコントロール・ハイアラーキーとAGIL図式という理論の準拠枠にもとづいて分析しているのである。

## おわりに

パーソンズの文化システム理論を概観してきたのであるが、ここではその一端を整理したに過ぎない。こうしたパーソンズの理論的枠組みの有効性と限界性がどこにあるのかを詳細に検討することこそが必要であろう。本論では詳細に論ずることはできないが、いくつか言えることとして、文化をシステムとして捉えることによってそれを行為理論と結び付けたことであろう。つまり、文化という要素が、社会システムやパーソナリティ・システムや行動有機体との関連で構造的に把握可能になったのである。また、文化システムの諸要素もその下位システムとして捉えられ、文化事象は、大きな文化システムの内に位置付け可能となり、理論的一貫性・整合性を保持したものとして「科学的」な文化の理論 (文化の社会学) への道を開いたということであろう。こうしたパーソンズのAGIL図式とコントロール・ハイアラーキーの理論的枠組みは、システムを構成する事象の分析には有効性を持つものである。

しかし、一方で、パーソンズ理論の枠組みは、すべてに適用可能であるがゆえになにもものをも言い得ないとする批判もある。また、パーソンズの文化システム論は、国民国家=全体社会の枠組みを前提として構築されてきたものと考えられる。しかし、今日のグローバル化の下、そうした国民国家の

境界が曖昧となり、越境化する状況にあるのも事実である。であるならば、そこで前提としてきた国民国家=全体社会そのものが、いまや閉ざされたシステムとして完結しうるのでどうかをも問わねばなるまい。

さらには、パーソンズがその文化システム論のなかで捉えてきた一般行為理論における文化の位置づけは、中立的なものとして、その社会の構成員すべてにあたかも〈平等〉に配分されていると指定されている。そこには、最近のカルチュラル・スタディーズなどの研究潮流にみられる、せめぎあう場としての文化、意味をめぐる文化の政治学といった視点は不問のままである。<sup>52)</sup> パーソンズ文化理論にみられるこうした文化の同質的支配性もまた問わねばなるまい。

### 註

- 1) パーソンズは、人類学者のA. L. クローバーと共同で、文化と社会の両概念についての「宣言」を発表している。The Concept of Culture and of Social System, *American Sociological Review*, vol.23, 1958.
- 2) Parsons (1951a) 訳書, p.5
- 3) 同前, p.10
- 4) のちにみるように、後期パーソンズの文化システム論においては、この三様式は、認知的、表出的、評価的、実存的の四つに再編成されている。
- 5) 同前, p.34
- 6) 同前, pp.34-35
- 7) 同前, p.90
- 8) 外的-手段的な要件あるA機能(適応 Adaptation)は、システムにとって処理可能な便益を提供する機能である。社会システムにおいては、貨幣と市場の制度化をもとにした経済機能がこれにあたる。外的-目的的なG機能(目標達成 Goal-attainment)は、システムとその外的状況との関係一定でなく変異性をもつために、外的状況に柔軟に適応するための機能である。外部との関わりによる緊急性の尺度に応じて目標が配列されなければならない。社会システムあっては、政治組織がこの機能を担当する。内的-目的的なI機能(統合 Integration)は、システムが効果的に作用するように、システム内の諸要素やサブ・システムを相互に調整する機能である。社会システムの法規範や司法組織がこれに相当する。内的-手段的

なし機能（パターン維持あるいは潜在性 Pattern-maintenance or Latency）は、システムの構造を規定する「制度化された文化」の安定性を維持する機能である。システムを維持するような文化の型とりわけ価値を、構成員が内面化し、相互行為を安定させる機能である。社会システムでの教育や種々の社会的エージェントによる機能がこれにあたる。

- 9) パーソンズの理論には、この分析図式を、すべての現象へ適用しようとする「形式主義」的な特徴が見られるとの批判もある。
- 10) Parsons (1961) 訳 [1991], p.2
- 11) Parsons (1951a) 訳書, p.264-265
- 12) たとえば、なぜ報酬と剥奪とがかくも不平等に人間の間分布しているのかといったことや、この分布が人々の〈行為〉に対してどのような関係をもっているのかといったことなど。
- 13) 同前, p.265
- 14) Parsons (1951b) 訳書, p.328
- 15) 同前, p.330-331
- 16) 同前, p.333-355
- 17) イデオロギーの認知的ゆがみの原因についてパーソンズは次の3点を指摘している。
- ① ある社会システム内の価値志向は、たとえば職業構造における普遍主義と血縁主義 (kinship) における貴族主義 (ascription) の強調の場合のように、完全な統合を形成しえないこと
  - ② 集合体の規模が大きくなるにつれて、認知の単純化・低俗化 (=大衆心理による通俗化) が起こる傾向にあること
  - ③ イデオロギーのもつ強い評価的志向が「願望的」な要素を内包しがちであること (Parsons (1951b) 訳書, p.352-353)
- 18) 同前, p.367-368
- 19) 丸山哲央(1991), p.151

また、信念システムにおける宗教的観念とイデオロギーは、ともにカセクシ的、評価的な関心とのかかわりのもとで、行為の認知的な状況規定を行う。両者はともに、行為主体の「意味の問題」への解答を容易する。しかし、イデオロギーが経験

的な実在の世界を志向するのに対して、宗教的観念は超自然的な世界を志向する。この意味で、イデオロギーと宗教的観念とは立論の前提を異にするため、イデオロギーが科学に傾斜する一方で、宗教的観念は文化の下位システムのうち第四のカテゴリーである実存的システム（意味志向のシステム）により強く関連づけてとらえられる。（解説、p.152-153）

20) Parsons (1961) 訳 [1991], p.125

21) 丸山 (1991), p.152

22) 同前, p.151-152

23) この方法とは次の三つである。

- ① サイバネティックなコントロール・ハイアラーキーによるもの
- ② 外的-内的軸によるもの
- ③ 手段的-成就的軸によるもの

24) ここでいう事実 (facts) とは、経験的な現象についての言明 (statement) であって、現象そのものではない、現象自体は文化システムの外部の状況に属している。それは、認識主体が志向している客体の部分であって、経験的な意味ではない。

25) Parsons (1961) 訳書, p.10-11

26) Parsons (1951b) 訳書, p.381

27) 同前, p.382

28) カセスシスとは、精神分析学で用いられる用語で、何らかの対象に精神的エネルギーが向けられることである。誘意性あるいは誘発性 (valence) にほぼ対応する概念である。（『文化システム論』p.18, 訳註）

29) Parsons (1951b) 訳書, p.383

30) パーソンズはその例として、母親の幼児に対する個別的な行為をあげて説明している。

「子どもの泣き声に対する母親の反応は、単に子どもが泣き叫ぶにいたった個々の苦痛を取り除く道具的処置としてではなく、その子どもにたいする母親の態度を『象徴するもの』と、生まれて間もない頃から子どもが明らかに感じるようになる。したがって、表出的シンボルの原型は、かかる象徴的行為である、といえる」(Parsons (1951b) 訳書, p.383)

31) 同前, p.383

- 32) 同前, p.384-386
- 33) 同前, p.386
- 34) 同前, p.386-387
- 35) 同前, p.393-394
- 36) 同前
- 37) 同前
- 38) Parsons (1961) 訳 [1991], p.19
- 39) Talcott parsons, Edward Shils, Kaspar D. Naeglele and Jesse R. Pitts (ed.), *Theories of Society: Foundation of modern Sociological Theory*, The Free Press, 1961. 所収の T. Parsons による Part Four (Culture and the Social System) のうち, C. Expressive Symbolism の Editorial Foreword, (以下, Part 4-C と表す) p.1165
- 40) Parsons (1961) 訳 [1991], p.19
- 41) Part 4-C, p.1165
- 42) Parsons (1961) 訳 [1991], p.23
- 43) Part 4-C, p.1165
- 44) Parsons (1961) 訳 [1991], p.23
- 45) 同前, p.21
- 46) 同前, p.23
- 47) 同前, p.26
- 48) Part 4-C, p.1165-1166
- 49) Parsons (1961) 訳 [1991], p.28-30
- 50) 同前, p.31
- 51) 同前, p.32-34
- 52) カルチュラル・スタディーズおよびその文化概念については, 拙論「カルチュラル・スタディーズにおける〈文化〉概念」(『佛教大学大学院紀要』第28号2000年3月発行)を参照のこと。

#### 《文献》

Grossber, L., Nelson, C. & Treichler, P. (1992) "Cultural Studies: An Intro-



duction” in *Cultural Studies*: ed. By Lawrence Grossberg & Cary Nelsobs & Paula Treicher (T. ネルソン, P. トレクラー, L. グロスバーク「カルチュラル・スタディーズとは何か」(『現代思想』1996. 3, 特集:カルチュラル・スタディーズ, 青土社)

丸山哲央 (1977)『文化と価値—文化体系論ノート』金城学院大学人文科学研究会

—— (1991)『文化システム論』解説, ミネルヴァ書房

小笠原博毅 (1997)『文化と文化を研究することの政治学 — スティアート・ホール  
の問題設定』『思想』No873. 岩波書店

Parsons, T. & Shils, E. (1951a) *Toward a General Theory of Action*, Cambridge, Harvard University Press. (T. パーソンズ & E. シルズ編著『行為の総合理論をめざして』永井道雄・作田啓一・橋本真共訳, 1960, 日本評論新社)

—— (1951b) *The Social System*, Glencoe, Ill., the Free Press. 1951b. (T. パーソンズ『社会体系論』佐藤勉訳, 1974, 青木書店)

—— (1961) Shils, E., Kaspar, D., Naegele, D., & Pitts, J. R., (ed.), *Theories of Society: Foundation of modern Sociological Theory*, The Free Press. (このうち, Parsons による General Introduction 第二論文と Part Two の Introduction は, 倉田和四生訳『社会システム概論』1978, 晃洋書房, そして Part Four (Culture and the Social System) は丸山哲央訳『文化システム論』1991, ミネルヴァ書房.)

田野崎昭夫編『パーソンズの社会理論』1975, 誠信書房

Williams, R. (1958) “*Culture and Society*” (レイモンド・ウィリアムズ『文化と社会』ミネルヴァ書房, 1973)

—— (1976) *KEYWORDS – A Vocabulary of Culture and Society*” (レイモンド・ウィリアムズ『キーワード辞典』晶文社, 1980)

(ひらた たけし 佛敎大学大学院社会学研究科博士課程)

## Culture as a System: the Concept of Culture in talcot Parsons

Takeshi Hirata

The purpose of this article is to examine Talcott Parsons' theory of the cultural system based on his general theory of action. Parsons employs two theoretical frames of reference for analyzing culture as a system. One is cybernetic control hierarchy, which is a structural concept according each element of an action system is ordered hierarchically through the controlling and conditioning factors. Parsons places culture in highest class of the whole action system. The other is the AGIL scheme, which consists of four functional prerequisites represented by the intersectional axes: internal-external and instrumental-consummatory. According to this scheme, culture can be analyzed as a system whose elements carry out four functions: Adaptation, Goal-attainment, Integration and Latent-pattern maintenance.